

拝啓

桜の花が咲き、春爛漫の頃となりました。お元気でお過ごしのことと思います。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。第 60 号をお送り致します。読んで頂く人がいたおかげで、60 号に達することができました。60 号とは、人間で言えば還暦ですね。

今回の神谷先生の文章「第 3 のコペルニクスの転回」の中に、

- ・時間はきわめてふしぎな哲学的な問題であること。
- ・自分の一生の時間も悠久たる永遠の時間から切りとられたごく小さな一部分であること。
- ・一生のうちに「永遠の今」を味わうひともあること。

が書かれています。時間が大切、おろそかにすべきでないこと、使い方によっては永遠の今を生きることも出来る、という意味かと思います。

そこで、思い出すのが「小西芳之助先生余芳」に載っている、角田勇さんの追憶文です。角田勇さん（故人）は、新潟県の農業者で、本誌の読者角田きわさんの義父です。

昭和 52 年、小西先生が角田さんの家を訪問された時、角田さんは、小西先生に「人生とは一言で言ったらなんですか」と聞かれました。小西先生は、にっこりお笑いになって、「私は只今永遠の命に生きる」と答えられたといひます。小西先生は、毎日を真剣に、永遠の命を生きているという気持ちで過されたのだと思います。

神谷先生も、超多忙な生活の中で、こま切れの時間を集めて、不朽の価値がある文章と生活例を後世の人に残されました。

最近私が、関心を持っている相田みつをさんも、時間を最も大切に考えた人です。相田さんは、禅宗のお坊さんの資格を持っている方で、禅の思想を詩や書の形で書いていると聞きました。相田さんの「時」という詩は、

「アノネ/時は金なり/なんていうけれどね/時はいのちだよ/『いま』という/このときは/自分の一生の中の/一瞬だから/ね」

小西先生の「目の前の義務を果せ」という単純な教えが、実は永遠の命に通ずる深い意味を持った教えであったことに気づかされています。

どうぞ皆様も、時間を大切に使い、人（本）との出会い（エンカウンター）を大切にされ、生きがいのある人生を送られますように。

お元気でお過ごし下さい。

敬具

平成 19 年 3 月 28 日

山口周三

エンカウンターの読者各位